

聖書：創世記 46：1～34

説教題：おまえの顔を見たのだから

日時：2024年7月7日（朝拝）

前の章の最後でヤコブは信じられないニュースを耳にしました。エジプトに穀物を買に行った息子たちが無事に人質になっていたシメオンを連れて、またヤコブが大切にしていたベニヤミンを連れて帰って来ましたが、そればかりでなく何と「ヨセフはまだ生きています！」と告げました。とうの昔に獣に食い殺されたと思った彼が生きていて、何とエジプト全土を支配していると言います。ヤコブは茫然として、その言葉が信じられませんでした。それは無理もないことです。考えられない話です。しかしヨセフが話したという内容をすべて聞き、彼が送ってくれた車を見て、ヤコブは元気づきます。そして言いました。45章最後の節：「十分だ。息子のヨセフがまだ生きているとは。私は死ぬ前に彼に会いに行こう。」こうしてついにヤコブとヨセフが再会を果たす場面が今日の章に記されます。

ヤコブは自分に属するすべてのものと一緒にエジプトに向けて出発しましたが、ベエル・シェバまで来た時、心配になったようです。ベエル・シェバは、ご存知の通り、約束の地に南端にある町です。つまりここから外へ出てしまっても良いのかという恐れです。かつてアブラハムはここから出てエジプトへ行って失敗しました。イサクも飢饉のため、エジプトへ行こうとしましたが、主なる神から「エジプトへは下ってはならない。わたしがあなたに告げる地に住みなさい」と言われました。今ヨセフがエジプトで生きていてエジプト全土を支配する者となっていること、その彼がエジプトへ来るようにと招いてくれていることは神の特別な導き、摂理のようにヤコブには思われたでしょう。しかし果たして本当にカナンを後にしてしまっても良いものか。そこでヤコブは父イサクも祭壇を築いたベエル・シェバでいけにえを献げ、主を礼拝しました。すると主からの答えがありました。3節で神は「エジプトに下ることを恐れるな」と言われました。この言葉からもヤコブが恐れを抱いていたことが伺えます。その彼に主は今回は、行け！と言われます。わたしはそこであなたを大いなる国民とすると言われました。なぜアブラハムやイサクの時はダメで今回へ行け！なのでしょう。これは神の前々からのご計画によることでした。主はアブラハムにかつて創世記 15章 13～14節でこう言っておられました。「主はアブラムに言われた。『あなたは、このことをよく知っておきなさい。あなたの子孫は、自分たちのものでない地

で寄留者となり、四百年の間、奴隷となって苦しめられる。しかし、彼らが奴隷として仕えるその国を、わたしはさばく。その後、彼らは多くの財産とともに、そこから出て来る。』 このかねてから示されていた御心がついに実行される時が来たのです。主は「このわたしが、あなたとともにエジプトに下り、また、このわたしが必ずあなたを再び連れ上る」と言われます。また「ヨセフが、その手であなたの目を閉じてくれるだろう」と言われました。こうして主からの言葉を受けてヤコブは確信をもってエジプトへ向かうこととなります。

8 節以降にはエジプトに来たイスラエルの子らのリストがあります。このようなカタカナの名前が続く箇所が出て来ると、私たちはこれを読むのに何の意味があるだろうと思ってしまいやすいのですが、もし自分や家族の名が記されているとしたら、これほど注意を引き付けられる箇所もないというほどの箇所になるに違いありません。私の名はきちんとあるか、あの人の名はどこにあるか、それぞれの兄弟はきちんと記されているかと深い関心を持って読むことになるでしょう。確かに今日の私たちには一見読みにくいのですが、少し忍耐して目をやると、きちんと整理して書かれています。ここはヤコブの4人の妻に従って書かれています。まず8～15節はレアを通してヤコブに与えられた子と孫のリストです。レアからは6人の息子が生まれました。9～14節のそれぞれ最初に記されている通り、ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルンの6人です。そしてそれぞれの子どもたち、すなわちヤコブの孫にあたる者たちがその下に記されています。合計33人です。次の16～18節はレアの女奴隷ジルパを通してヤコブに与えられた子と孫のリストです。ジルパからはガドとアシエルの二人が生まれました。それぞれから生まれた子どもたちを合わせて合計すると16人になります。19～22節はラケルを通して与えられたヤコブの子と孫のリストです。ラケルの子はヨセフとベニヤミンの二人で、それぞれから生まれた子どもたちを合わせると全部で14人となります。最後の23～25節はラケルの女奴隷ビルハを通してヤコブに与えられた子と孫のリストです。ビルハから生まれた子はダンとナフタリの二人で、それぞれから出た子を合わせると合計7人です。この一人一人がイスラエルの子らとして神の御前に覚えられているということです。

そして27節に「エジプトに来たヤコブの家族は、全部で七十人であった」とあります。この70という数字は完全数を象徴するものでしょう。神はアブラハムを召して、あなたを大いなる国民とすると約束されましたが、このヤコブの時代にすでに70

人にまで増やされました。と同時に、これからさらに神の驚くべき祝福が記されるためにも、エジプトへ入った時は 70 であったという数字は大事であったと考えられます。申命記 10 章 22 節にこう記されています。「あなたの父祖たちは七十人でエジプトへ下ったが、今や、あなたの神、主はあなたを空の星のように多くされた。」 わたしはそこであなたを大いなる国民とすると今日の箇所です。約束された神は、確かにエジプトでイスラエルを桁違いに大いなる国民にされるのです。出エジプト記 12 章 37 節を見ると、エジプトを出る時には徒歩の壮年男子だけで約 60 万人であったと記されます。神は確かにイスラエルをエジプトで大いなる国民として後、そこから連れ出されることになるのです。

さて 28 節以降にはヤコブとヨセフの再会が記されます。28 節に「ヤコブはユダを先にヨセフのところへ遣わして」とあります。先の出来事を通してユダはヤコブに信頼される者になっていたことがここからも伺えます。彼がリーダーシップを発揮する者となって行くのです。ヨセフは車を整え、ついに父の前に現れます。そして父に会うなり、父の首に抱きつき、首にすがって泣き続けました。この感動的な再会においてイスラエルすなわちヤコブが次のように語ったと 30 節にあります。「イスラエルはヨセフに言った。『もう今、私は死んでもよい。おまえがまだ生きていて、そのおまえの顔を見たのだから。』」 この言葉を読んで私たちがまず思うのはヤコブの死に対する態度が全く変わっていることです。これまではこれと反対の雰囲気という言葉は彼が口から発していました。ヨセフが獣に食い殺されたと思った時、ヤコブは 37 章 35 節で「私は嘆き悲しみながら、わが子のところに、よみに下って行きたい」と言って、誰からも慰められることを拒みました。また同じラケルの子ベニヤミンを手放すように求められた時も、42 章 38 節で「もし彼にわざわいが降りかかれば、おまえたちは、この白髪頭の私を、悲しみながらよみに下らせることになるのだ」と言っていました。いずれにおいても「悲しみながら死ぬ」と繰り返していたヤコブです。その彼がここで「もう今、私は死んでも良い」と言っています。なぜでしょう。それは彼が心に抱いていた深い悲しみ、疑問が取り除かれたからです。ヤコブにとってヨセフを失ったことは彼の人生晩年に臨んだ大きな痛みでした。ところがそのいなくなっていたヨセフが今ここに生きている！その彼を見ることができた！このことはヤコブにとてつもない喜びと慰めをもたらしたのです。この彼の顔を見たからには、私は今や心からの満足と平安をもって地上の生涯を閉じることができると言ったのです。

しかしこれは単に親が失った息子をもう一回見ることができたから、それで満足して、もう死んでも良いと言ったというレベルのことではないと思います。ヤコブにとってヨセフはアブラハムから受け継いだ神の救いの約束と切り離せない存在だったと考えられます。なぜヤコブはヨセフをそんなにも愛したのでしょうか。それは神の救いの約束を中心的に担うのは彼だと思ったからでしょう。ヨセフは愛する妻ラケルとの間に生まれた最初の子です。ヤコブが愛する妻はラケル一人です。ですからその彼女との間に生まれたヨセフこそ、神の特別の祝福を担う者となるという思いでヤコブはヨセフを見つめて来たのでしょう。そのため彼にだけ特別の長服を作ってやりました。またヨセフ自身、夢を見て、兄たちや両親までもが彼を伏し拝む光景について話しました。兄たちはこれを聞いて怒り、ヤコブもその場ではたしなめましたが、ヤコブは「このことを心にとめていた」と37章11節にありました。やはりこの子は神の特別な祝福を担う子なのだとヤコブは考えたことでしょう。その彼が突然失われたからこそヤコブは受け止めきれない大きな悲しみの中にこれまで沈んでいたのです。ところがそのヨセフが生きていて、その彼の顔をヤコブは見ることができました。ヤコブはここにヨセフを見ることのできた喜びとともに、彼の存在と一つに結び付いている神の救いの約束を深く心に覚えて慰められたと思うのです。

ちなみにヤコブの生涯においては、これまでも誰かの顔を見ることは特別な意味を持つ出来事でした。まず思い起こされるのはヤボクの渡し場を渡ったところで神と格闘し、神を見た！というあのペヌエルの経験です(32章30節)。ヤコブはあの時、顔と顔を合わせて神を見る経験をして、その後の信仰生活が大きく変えられました。また次の章に書かれている兄エサウとの再会もそうでした。33章10節でヤコブはエサウにこう言いました。「私は兄上のお顔を見て、神の御顔を見ているようです。」ヤコブはエサウの顔を見た時、その背後に神の存在と恵み深い導きを見て取りました。今日の箇所も同じような経験だったと思います。ヤコブはヨセフの顔を見て喜びましたが、ただ彼の顔を見ただけでなく、この背後に神の救いの約束の確かさ、また神の真実さを見たのではないのでしょうか。だから、もういつ私は死んでも良いと言ったのではないのでしょうか。

そしてこのヤコブの言葉と関連があると思われるもう一つの言葉が新約聖書にあります。ルカの福音書2章28～29節の老シメオンの言葉です。彼は幼子イエスを腕に抱いて、このように神をほめたたえました。「主よ。今こそあなたは、おことばど

おり、しもべを安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです。」 老シメオンは幼子イエス様を見て、神の救いの確かさを思い、深い満足を得て、「主よ。今こそあなたは、・・・しもべを安らかに去らせてくださいます」と言いました。今日のヤコブの言葉と、このイエス様を腕に抱いた老シメオンの言葉は深いところで一つにつながっているように思われます。いずれも神の救いのみわざの確かさを思って平安に満たされたのです。私はこの救いの神のゆえに死後のことについても平安であると言ったのです。そのような神の大きな救いの恵みを味わいつつ、その神の導きのもと、神が引き合わせてくださったヨセフとの再会をヤコブは喜んだのです。

ヨセフは兄弟たちと父の家の者たちに言います。私はファラオのところに知らせに上って行き、申しましよう。そしてあなたがたもファラオから問われたら、「しもべどもは家畜を飼う者でございます」と答えるようにと言います。そうすればゴシェンの地に住めるでしょう。「羊を飼う者はみな、エジプト人に忌み嫌われているからです」と彼は言います。だから家畜を飼う者だと言えば町の中に住むようにとは言われない。町の外の牧畜に適した場所を与えられるでしょう。その方がヤコブの家族にとっての良いことです。またその方がエジプトの異教的習慣から距離を置くことができるという観点からもヨセフは良いと考えたのでしょう。そしてファラオとのやり取りを経て実際にゴシェンの地を与えられる様子が次章に記されることとなります。

以上、ヤコブはヨセフとの再会を通して神の救いの約束の真実さを改めて味わう者とされました。そして自分はいつでも平安をもって世を去る準備ができたと言いました。アブラハムへの約束が指し示す救い主イエス・キリストを見た老シメオンも、この方を見たからには自分は平安をもって世を去ることができる！と言いました。私たちはどうしたら、彼らと同じ心をもって死に備えることができるのでしょうか。それは彼らと同じく神がくださった救いの約束を見つめ、またその救い主を見つめることによってでしょう。神の古からの約束がイエス・キリストにおいて成就したことを知り、その方に自分の全存在を投げかけ、より頼むことによってでしょう。その時、私たちは地上におけるここまでの神のお導きを感謝しつつ、心からの平安と満足をもってこれから先の歩みをもお任せすることができるのです。またこの恵み深い神の導きの下で、やがて天の御国で、主にある愛する方々と相見えることができるという祝福も今日の章は私たちの前に描き出してくれているでしょう。神の約束は真実であり、神の

約束により頼む者たちを神は失われたままにはされません。神はご自身の恵みにより、その人を生かし、保ち、取り戻してください。もう会えないと思っていた主にある民と再会することができるように導いてくださいます。この約束に真実な神を見上げて、この方により頼み続ける歩みを引き続き御前にささげる者たちでありたいと思います。そしてこの地上の生涯を全うして、かの日に、神が与えてくださった救い主を通して、ただ恵みにより、愛する者との再会を果たし、神をともにほめたたえる、その救いと幸いに生かされる者たちでありたいと願います。